

野沢温泉村の温泉街における空間構成に関する研究

平成 28 年 2 月 田辺 英文

要旨

目的

近年、自然と人との営みの融合とによって育まれてきた地域固有の住環境が織りなす風景である「文化的景観」に対する関心が高まっている。温泉地もその一つであるが、この景観を保全していくためには、景観を構成する要素の関係性や人々の生活・生業を理解する必要があると言える。そこで、本研究では、長野県下高井郡野沢温泉村の温泉街を対象とし、空間構成の観点から、対象地の現状の把握及び考察を行う。

方法

対象地へヒアリング調査・資料調査・現地調査を行い、地域住民のどのような生活や生業に影響して地域固有の文化的景観を形成されているのかを把握したのち、収集した情報より、重要な空間構成要素を「宿泊施設」、「商店」、「共同浴場」に選定し、地理情報システムを用いて街路の分類・比較を行い、現状の把握を行う。最後に対象地が抱える問題を提起し、解決策や今後の方向性について提案する。

結論

街路の分類・比較を行った結果、「旅館」が立ち並ぶ街路周辺には、明治時代から続く旅館の他に、最も古くから開湯されている「共同浴場」、明治以前産業の中心的地点である麻釜など重要な空間構成要素が集中していることなどから、古くからある地域固有の景観が現存することが明らかになった。しかし、旅館を含む多くの「宿泊施設」は、スキー場の開発・発展や、高度経済成長期における交通網の発達による入込客の急増と利用客の意識の変化に合わせて大型化・西洋化していった。スキーブームが収束し観光客が減少しているいま、温泉資源を活用した観光産業に目を向けて、本来あるべき地域固有の良さを取り戻すことが重要であると言える。

指導教員 藤居 良夫 准教授